

紀元前 538 年、ペルシア王キュロスはバビロンに捕らわれていたユダヤ人に、祖国への帰還を許し、エルサレム神殿を再建するように促します。そこで、紀元前 537 年に、ユダヤ人の一団がエルサレムに帰還を果たし、神殿の再建に取り掛かります。しかし神殿の再建は容易ではありませんでした。経済的にも、人的にも、とても神殿を再建できる状況ではなかったのです。神殿は完全に破壊されて、何十年も放置されたままであり。さらに、隣国サマリアの妨害もありました。紀元前 520 年末になって神殿の再建作業は再開され、紀元前 515 年に完成しました。帰還から 22 年が経っていました。

しかし、神殿の再建後も状況は相変わらず困難で、無秩序でした。このような状況の中で、第三イザヤは帰国後の生活に幻滅して熱意を失いあるいは不誠実になっている人々に対して、目の前の出来事に右往左往せず、神さまをまっすぐに見て、神さまに従って歩むことを勧めたのです。

第三イザヤは、神さまの救いが実現しないのは神さまのせいではなく、人間の側の悪と罪のせいであると語るのです。「本来、正義がなければならぬ公開裁判の場である広場に満ちた悪と罪のゆえに、神さまの正義はよろめき、そこを通ることもできない。」、と言うのです。神さまはこのようなエルサレムの有様を見て、心を痛めました。神さまはエルサレムに神さまの正義を行う人が一人もいないのを見て、執り成す人がいないのを驚かれた、と言うのです。自分のことだけを考え、他の人のことに心が行かず、一人ひとりの存在が尊ばれない社会、人が人として受け容れられない社会、まさに闇の中を歩いている状況だったのです。そして、神さまは人を罪から贖う者として、エルサレムにあって自分の罪を悔いる者たちのもとに来ると、言われると言うのです。このような状況のなかでも神さまは代価を払って人々を連れ戻し、ご自分のものとしてくださるのです。大切なことは完璧な人間になることではありません。むしろ、一人ひとりの存在を是認し、受け入れ、愛して下さる方がおられる、その方を信頼して共に歩いていくことなのです。

初期キリスト者はイザヤ書のこの言葉をイエスのことを述べていると理解しました。ヨハネによる福音書 8 章 12 節には、「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」と、またヨハネによる福音書 12 章 46 節には「わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に来た」と記されています。イエスは私たちの光として、私たちが闇の中を歩かなくてもよいように、一人ひとりの能力や功績や価値によらず、どの一人も大切に、罪を赦し、愛に生きる者としてくれるために、世に来たのです。